

山對層樓翠色濃。一川迴去遠如縫。温峯香靄高千丈。夜々松間古寺鐘。

早曉

東峯漸白曉鴉鳴。殘月西枕猶露明。誰結池塘春草夢。征人萬里在邊城。

七夕有感

綠蔭松下遇佳人。金酒銀杯待嘉賓。今夕行雲南北去。不知明日別離人。

軍中聽笛

霜寒高壘睡難成。幾處連營片月明。戎笛三更遠近動。聲々愁殺他鄉兵。

題宮城圖

九重城頭淡靄籠。風和鳥語入長空。池邊楊柳受朝日。常見千秋萬古同。

俳句

涼風吟

山陰に狭き青田の木曾路かな

雲の峰大はげ山の眞上なり

敷帳狭く宿のあるじと寝たりけり

南門に橋薫る旭かな

視て居ればまた子子の振り出す

癡寺井あり怪ありて九年浚へざる

千

返

窓に入る青田七里にあまるべし
 五月雨の靴古くして水の入る
 晝顔や蚯蚓死したる野の小路
 蠅群れて干瓢いよゝ剥ぎ難き
 蜀の軍或夜越たり夏の川
 雨乞の聖を恨む國の人
 日南す鮮屋の店に蠅多き
 蚊の聲に若葉小暗き庭の隅
 一隅に茄子植ゑたる青田かな
 化鳥鳴くや鎮守の森の五月間
 青嵐間道に起る鬨の聲
 街道の太守の列や五月雨るゝ
 日は西に山道險し合歡の花
 明け方に雨ふりたえぬ時鳥

秋風吟

朝霧や荒庭の芙蓉咲んとす
 星月夜西にかゝるは箒星
 廣庭や芭蕉に月の落ちかゝる

紫

川

紫

川

水打てば秋海棠に風起る
城跡の烟どもならず秋の風
石原の野菊小さくねじけたり
秋の川渡れば古き社かな
紅茸をとらまくほしき女哉
星月夜親兵衛馬を走らす
八月の比叡風や湖の上
鞭つて馱馬を走らす野分かな
下宿屋や障子破れて秋の風
門に立てば柳が顔に散りがゑる
名月の池に浮きたり何の魚

批評

第六十六號の和歌を評して、所思を瀝す。芝山隱士

和歌は、第六十六號に於る花なりき。俳句、六十號を以て棹尾的運動をなま、跡を雲烟の裡に没してより、一時全く煙滅の境に陥り、和歌獨、其美を肆にせり。往々漢詩の其間に散點せる無きにあらざるも、作者の手腕未だ幼稚にして、想高からず、措字平凡にして詩形をなせるもの罕に、只、粧飾これ事として、乾坤の至理を歌ひしもの有るを見ず。加るに我校逸足之士、多くは和歌に入り、ひたすら和歌